
透徹のタナトス

幼女が好きです

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

透徹のタナトス

【Nコード】

N5187I

【作者名】

幼女が好きです

【あらすじ】

今を精一杯に、しかし飄々と生きる、自分を一枚目半なハードボイルドくずれと称する青年、暁許 綴はある日、煌びやかな光と喧騒に包まれた夜の町で幼い1人の少女を拾った。

その出来事が口火を切ったのか、それから青年を襲い始める信じがたい非日常。

不可解なもの。

『リドウム』。

顕現せし幻想の担い手、異能力者。

『幻想使い』。

己と少女に伸びる、それらの理不尽ともいえる魔の手から
忍び
よる死から、青年は逃れようと走り、対抗し、対峙する。

ただ、精一杯に今を生きようと、幼き少女の手を握って

act 0・始まりの夜、差し伸べる手

その昔、この世に1つの命として産み落とされた少年は、穏やかな家庭に生まれ、優しい母や父、妹に囲まれて育った。

決して裕福ではなかったが、そうでなくとも十分に、いや　十分すぎる程に幸せだった。

そんな彼とその家族に、何の前触れもなく、何の脈絡もなく、突如として訪れた悲劇。

それは、少年から大切な家族とささやかな幸せを奪い去り、果てしない絶望と哀しみを与えた。

それが14年前。

それからちよつとした年月と経緯を経て、自分を襲った悲劇から辛うじて立ち直る事が出来た少年は、友達という掛け替えのない大切な宝物を得る。

しかし、理不尽な不幸とその‘不可解なもの’は、無情にも少年から再び大切なものを奪い去った。

世界は再び少年へ、絶望と虚無感と　世界への失望を与えた。

それが8年前。

少年は呪った。憎んだ。嫌悪した。その不条理な現実を自分にもたらすどうしようもない世界を。

世界はどうしてこんなにも悲しい出来事を自分に与えるのか。

世界はどこまで自分に対して敵しいのだろうか。

そう思いながら、世界を呪いながら生きる内に、少年は様々な出来事を目にした。様々な情景を、理不尽を、不条理を、その目に映した。

そして少年は悟った。知った。気づいてしまった。

自分達の生きるこの優しい世界は、どうしようもない物語で溢れていると。

そして、己が背負っている過去もまた、ありふれた物語の1つにか過ぎないと。

泣けない悲劇も、笑えない喜劇も、自分達が生きるこの空の下では例外なく平等に発生する。

自分のような過去を持つ人間など、自分と同じような境遇の人間など、幾らでもいる。

世界は理不尽な博愛主義で、なにもかもを許容するのだ。

故に、世界を呪う事に意味など無いのだと。

世界を憎んでも意味が無いのだと。

世界を嫌悪した所で、何も起こらないのだと。

世界を非難していたって現実は変わらない。自分も変わらない。

何せこの世界に非など無いのだから。

負の感情の矛先を世界に向けた所で、それら全ては全くもって無意味。

この優しい世界を受け入れてその上で割り切らなければ、前に進む事など出来はしない。

そして、少年は懸命に生きた。

己が背負う過去を忘れられるように、楽でいられるように、いつでもどこでも飄々としながら。

自分を引き取ってくれた家でも、学校でも、社会でも、良好な人間関係を築き、上手く立ち回り、ただただ懸命に。

ただ、過去のような悲しみは真っ平御免だと、誰かと仲良くなったとしても、必ず一線を引くようにはしていた。

引いた線のその先には飛び込まないように。

だが、少年は根本的に甘かった。色々。

いくらそう思った所で、いくらそう意識した所で、いくら他人と自分を断絶しようとした所で、少年はやはり甘かったのだ。

そんな曖昧な境界線の上を生きる少年の姿は、実に道化。他人の目からは滑稽としか映らない。

そしてそれは

（ああ、くそつ。痛い。超痛い。マジ痛い。俺ってばよく死ななかつたよな……ホント）

少年から青年へと成長した今となっても、何一つ変わらない。

夜の町の路地裏で偶然見掛けた、人身商売を生業としている男二人

に絡まれていた若い少女をちょっとした老婆心から助けてあげようとして、その少女を追っているらしい変な輩から逃げる為、少女のそのか弱い手を握って共に走り出した。

さあ、それからが大変だった。いや、大変などという言葉で済む筈がなかった。

少女を追っていた輩というのがまたとんでもない人間で、お前どっかの漫画から飛び出てきちゃったの？とつい口に出してしまう程の非現実を青年に叩きつけたのだ。

しかしまあそれは何かの縁か。青年はその非現実的光景を過去にも何度か目にしており、さらにはそれらの非日常と実にギリギリな隣りあわせで生きていた為、目の前の不条理と恐怖に吞まれる事無く行動することが出来た。

そして決死の思いで逃げのび、血を流したり体の一部に小さな風穴を空けたりなどといった痛手を負ったものの、なんとか無事にいる。

いや、その負傷した様を無事と表現していいのか定かではないが死んではいない、生きている。

それらの怪我も、これまで必死に立ち回って培ってきた人脈を活用し、結構長い付き合いになるであろうとある医者に診てもらい、治療も施してもらった。

今は丁度、その医者 of 診療所から出てきた所。だが、問題はそこからだ。

まだまだ痛む、負傷した箇所を包帯の上からさすりながら歩く青年

の前には、そんな彼を心配そうに見つめている少女がいる。

その身に纏う雰囲気はどこか大人びていて年不相応だと感じられるが、恐らく、まだまだ幼い外見から予想すれば年齢は10才程だろう。

そんな少女は、当然ながら、青年が決死の思いでふざけた輩の魔の手から救い出した少女その人である。

この少女　家を聞いても、親の事について聞いても、これからどうするのか聞いても、分からないと小さく零すばかり。
まあ所謂、記憶喪失と言う奴である。

あんな非常識な輩に追われていたのだから、何か訳ありなのだろうが　こんな少女にこれ以上構った所で、見返りはないどころか命の危険さえある。このまま見捨てて放っておくが吉。

幸い、少女の方もこれ以上自分に迷惑をかけたくないらしく、無言ではあるがサヨナラしようとしている。

だから、無難に生きる為には、このまま見捨てるという選択をとった方が最善だ。

触らぬ神に祟りなし。

全く、その通りである。

しかし、生憎と、青年は触ってしまった。触れてしまった。記憶をなくし、物騒な輩に追われ、物騒な夜の町を1人でさまよい、困り果て、無表情ではあったが見るからに泣きそうだったその少女に、一度でも手を伸ばしてしまった。

手を握ってしまった。

もう引き返せない。いや、引き返しはしない。

タナトス
死と隣り合わせな位地に立っているであろういたいけな幼い少女をむざむざと見過ごせる程　この優しい世界程、青年は、寛容ではないのだから。

だから。

「おいおい。お嬢さんってば、そんな寂しそうな顔して一体どこに行こうってつもりなのさ？」

自分に頭を下げ、小さくありがとうと礼を述べて立ち去ろうとした少女に、呆れたように声をかけた。それに反応した少女が青年を振り返ると、彼女の頭に青年の手のひらが優しく置かれる。

「どこか行く宛でもあるっていうなら引き止めないけど。そこら辺、どうよ？」

青年の言葉に、少女は躊躇いがちに頭を小さく横に振る。当然である。少女は記憶喪失なのだから。

「そっか。ならまあ、あれだな。とりあえず」

少女の肯定を確認すると、張り付いたようなそのへらへらした笑いの中に一筋の温もりを落としながら

「　　ウチ、来るか？」

青年は少女に、手を差し伸べた

a c t o ・ 始まりの夜、差し伸べる手（後書き）

皆さん初めまして。

この度はこの作品に目を通していただいて誠にありがとうございます。この度はこの作品に目を通していただいて誠にありがとうございます。

作者の幼女が好きです。

……自分で名付けておきながら何ですが、こうして丁寧語で語る上では何とも紛らわしい名前ですね。ちなみにこの名前、意外と気に入ってたりしますが、この名は冗談の範疇で名付けただけで、私自身は別にそういった特殊な性癖なんて持ってないですからね？本当ですよ？子供は好きですが。

さて、なんとというかこの作品、なんだか色々パク（ryげふんげふん。パロってるんで主人公やその他諸々にとつもない既視感を覚えやすいですが、そこら辺はご愛嬌ということでしょうか。

色々と拙い私の作品ではありますが、長い目で見守っていただければ幸いです。

act 1 . ある日、暗い空の下

そこは、暗い暗い闇の底。

それは死の記憶。

それは喪失の記憶。

それは絶望の残骸。

一度目は家族。

両親はズタズタに引き裂かれ、亡骸は既に形を保っていないかった。そして、体の損傷は両親ほどではなかったにせよ、決定的な致命傷を負い、しかしそれでもまだ息のあった幼き妹は、兄である少年の目の前で静かに息絶えた。

脈絡もなく、予兆もなく、幸せな家族を突如襲った惨劇。

それは唯一生き残った幼き少年に深い傷跡を残した。

二度目は親友。

少年を絶望の中から救い出してくれた、親友である少女が少しずつ形を失ってゆく光景。

少年の懐で涙を流し、力なく微笑み、想いを告げて大切な親友はこの世から去ってしまった。

呪った。憎んだ。

どうしようもないこの優しい世界を。

ままならないこの世の中に絶望し、そして他の何かに全てを押し付けて逃避している自分に絶望した。

何故なら、過去の物語は何もこの世界だけの所為^{せい}ではないのだから。

そう。少年も罪を背負っているのだ。

そう。そうだ。

一度目はともかく、二度目の悲劇をもたらしたのは、他でもない

「っー!!」

そこで、少年から青年へと成長した彼は目覚めた。

勢い良くベッドから起き上がり、現状を整理しようと周囲を見渡す。

見覚えのある景色、慣れ親しんだ空間。

そこは自分の住居である、とあるアパートの一室だった。

「夢、か……」

激しい動悸を落ち着かせながら、どこかほっとしたような様子でそ
う呟く。

そして冷や汗を体中にびっしょりと掻いている事に気付くと、シャ
ワーを浴びようと浴室に向かった。

「ふう。さっぱりさっぱり。　　っと、もうこんな時間か」

汗を洗い流して浴室から出ると、ふと目に付いた時計の針が指している時刻を確認するとそう眩き、支度を始めた。

窓からは夕日が差し込み、今は丁度日が沈み始めた時間帯である。青年は仕事に出向く為の準備を整えると、黒い外套を羽織り、玄関に向かう。

「さて、今日も一日頑張りますか」

飄々とした笑みを浮かべながらそう零すと、あまほろ暁許綴はもうしばらくで夜が訪れるであろう街の中へ出向くべく、足を踏み出した。

完全に日が沈み、夜の帳が下りた街の中。

雑踏に紛れながら、ビルが悠然と建ち並ぶオフィス街を綴は飄々とした足取りで歩く。

目的地はとあるオフィス。

そのオフィスの責任者　つまり社長であるとある人物に頼まれていた仕事を済ませたので、その報告と報酬を受け取りに赴くのである。

情報屋。

綴は自分の職業をそう称している。

彼は様々な所に繋がりを持っている。その範囲は幅広く、例えば街角の露天商だったり、例えばどこにでもいるようなサラリーマンだったり、例えば裏に通じた暴力団の長だったり、例えば政府の重鎮であったり、その伸ばしたパイプの先は、挙げればキリがない。

過去に起きた二度にも及ぶ悲劇以来、彼は様々な人間や組織の中で上手く立ち回り、良好な人間関係と幅広い人脈を培ってきた。

つまり、知り合いは数え切れないし綴を信用してくれている人間も少なくはなく、その中には社会に潜む闇や裏に通じている者もいる。そうなれば、何もしなくとも自然と情報は綴の耳に入ってくる訳で、表立って公表できないような情報だって必要となればいくらだって引き出せる。

ならばそれを上手く活用しない手はない。高校三年生の時に就職先に悩んでいた綴はそういつた考えに辿り着き、特定の職には就かないで自由気ままにフリーの情報屋を営むまでに到った訳である。

ただ、あらゆる情報に通ずるといふ事はそれ相応の危険性が伴うものだ。事実、何度か綴を亡き者にしようと動いた人間だって何人も存在した。

しかし今現在も暁許綴という人間が無事でいるのは、とある人物の後ろ盾があるからである。

その人物こそが今回綴が向かっているオフィスの主で、あらゆる蔭を伸ばして裏の世界を牛耳っている人間だ。

「到着、つと」

そう呟いて足を止めた綴の前に聳えるのは、周囲のオフィスとは明らかに一線を画す程に巨大なビル。

その入り口をくぐり、そのままエレベーターに向かおうとする綴を引き止めたのは屈強そうな出で立ちのある1人の若い警備員。

そんな警備員に、綴は不思議そうな視線を向ける。

警備員は、そんな綴の様子に訝しげな表情を浮かべながら口を開いた。

「君、見た所この会社の社員ではないようだが、受付にも顔を通さないで一体どこに行くつもりだ？」

「あれ？あんまり見ない顔だけど……もしかして、新しくここに配属された警備員さん？」

質問に答えなければかりか、逆に質問すらしてきたその青年を、警備員は不審者と判断して摘み出そうと前に出て

「馬、馬鹿！何やってんだお前っ!？」

慌てて出てきた先輩らしき警備員に頭を叩かれた。

自分に与えられた仕事をこなそうとした矢先に現れた先輩に、後輩警備員は頭をさすりながら何がなんだか分かっていない面持ちで口を開いた。

「な、何するんですか先輩。俺はこの不審者を摘み出そうと」

「あほっ！社長直々のお達しで、この人は基本的に自由な出入りが許可されてんだよ！」

えっ、と、後輩である警備員は驚きの声を洩らして少々困ったような笑みを浮かべている綴を見やる。

「申し訳ありません！コイツ、まだここに配属されて間もなくて……！」

「いやいや、別にそんな気にしなくていいって。彼はただ自分の仕事をこなそうとした訳なんだしさ」

後輩の頭を押さえてそれと一緒にひたすらに頭を下げる先輩警備員にそう言つと、すれ違いざまにもう一度「ほんと、気にしないでいからさ」と声をかけて今度こそエレベーターに向かった。

その後姿を見届けながら、先輩と一緒に頭を上げた後輩は呆然と口にした。

「……一体何者なんですか、彼」

その質問を受けて、幾ばくかの沈黙の後に、先輩警備員は答えた。

「俺も詳しい事は知らんが……社長と親しい間柄の情報屋で、あの社長の寵愛を受けてる唯一の人物らしい……」

社長室に続く扉の前で立ち止まり、綴が2、3度ノックすると、程なくして扉の向こう側から「どうぞ」という透き通るような少女とも女性ともとれる声が聞こえた。それを聞いて、綴は扉を開いて社長室の中に足を踏み入れた。

「ちーっス、頼まれてたお仕事終わったんでその報告に来ましたよっ　って、あれ。……シロ？」

陽気な様子で中に入るも、社長室の中に人の姿はなく、綴の問いかけに応える者もおらず、静寂だけがその場を支配していた。そして綴が、あれ、おかしいな、と呟き踵を返そうとして

「ふおうっ」

隙だらけな綴の体に背後から抱きつく人影が1つ。

突如訪れたその感触と耳元に吹きかけられた吐息に、綴は驚きの声を挙げて、次の瞬間にはそれが誰によるものなのか即座に理解した。

「……おいおい。心臓に悪いからこういっどツキリはやめなさいって、ホント」

「ふふ。相変わらず可愛い反応するよね、キミは。だからやめられない」

耳元で囁かれるどこか艶かしいその声に、僅かに身を震わせながら綴はため息をつく。

そしてその背後の人物は一先ず綴から離れると、彼の前へ移動して、微笑みながら口を開いた。

「いらっしゃい、ツヅリ」

それは 少女だった。

いや、彼女自身の年齢は成人した女性のそれなのだが、しかしその外見は、紛うことなき少女のものだった。洋風な社長室の内装には不釣り合いな真つ白な和服をその華奢な体に纏い、華を咲かせるような微笑を浮かべているその少女。

清楚で整った可愛いとも美しいとも取れる顔立ちに、腰まで伸びた美しい白銀ブラチナブロンドの髪。雪のような純白の肌。そして 紅い瞳。

日本人であるのに関わらず、奇異なるそれらの要素は、まさに神秘的で、神聖なる何かを思わせ、天使と形容しても何ら差し支えのないその美しさは、羨望と同時に畏怖の念を覚えさせる。

アルビノ。

彼女のような特徴を持つ人間、または動物は、世間一般的にそう呼ばれている。

彼女の名は白夜まへよひ。

それが本名なのか、偽名であるかは定かではない。

そして彼女こそが、この街の 裏の世界を総べる絶対なる支配者である。

「ほら、シロ。お前に頼まれてた仕事」

そう言って綴はどこからともなく青いファイルを取り出すとそれを白夜に投げ渡す。

この仕事というのは、情報屋と言う、単に情報をお金で売りつける本来の綴の仕事とは違い、白夜だけが綴に求める探偵の真似事であ

る。つまりは調査活動。

ある会社や組織などのきな臭い動き等を綴が秘密裏に調査して、それを白夜に提出し、それによって得た情報を、白夜が自分にとって邪魔な存在を潰す為の武器にする。

今回もその為の調査活動だが……いかんせん、これは極めて危険を孕む行為だ。もしも調査活動中にへマをやらかして足が付いて捕まってしまうっては、それはうっかりでは済まされないのだから。法の下に断罪されるか、もしくはこっそりこの世界から消されてしまう。

普通ならば、いくら羽振りがいいからといってもそんな危険な仕事は真つ平ごめんである。

だというのに、綴がそれを引き受けているのは、最悪捕まってしまった場合にもそれを強引に逃れる為の術である白夜という強大な後ろ盾があり、尚且つ、彼女に多大な恩がある為だ。

本来、そんな彼女には無償の恩返しをしたい所なのだが、危険な仕事であるし何より彼女からの報酬がなければ情報屋という不安定な職につきながら安定した生活など出来ない、そして彼女自身が報酬を支払うと言っているのだし、鋼の意志でそれを断つて何が何でも無償で恩返しをするという意志を持った高尚な人間でもない綴は「人のせつかくの厚意なんだしそれを無碍にはできないよね、うん」という自分に都合のいい解釈を持って、それにあやかっている訳である。

投げられたファイルを白夜は「女性にそんなぶっきらぼうな渡し方をするなんて、些かデリカシーに欠けてると思うよ？」と、柔らかか

い笑みを浮かべながら口にするとしつかり受け取った。

ちなみにシロというのは綴が白夜を呼ぶときの愛称である。

「へいへい、申し訳ござあせんね」

「そんな態度ばかり取るって言うのなら、今度からは仕事を回さないようにするけど」

「すみませんでしたあっ!!」

手のひらを返したように勢い良く頭を下げる綴。

「ふふ、冗談だよ。キミほど有能であちらこちらに顔の利く人間はそんなにいるものじゃないし、私にとつてキミはとても気安い相手だ。何より、安い報酬で依頼を引き受けてくれる。こんな有料物件を見ず見ず手放す筈は無いさ」

「…………お褒めに預かり恐悦至極」

安い報酬とは言っているが、綴のような民間人からすればそれなりに高い金額である。といっても、非常に危ない綱渡りを強いるにはそれは確かに安いものなのかもしれない。しかしそれも、幾ら白夜本人が高い報酬を支払うと言っても、綴本人が必要以上の金額を受け取ろうとしないので仕方のないことなのだが。

「あ、そうそう。ちなみに今回の報酬は、既にキミの口座に振り込んであるから」

「そりゃ手が早くて助かります」

少々肝を冷やした様子で小さくため息を吐くと、仕事も終わったのでその場を後にしようと綴は踵を返した。

「ツツリ」

出口である扉まで歩いて、ふと、背後から掛けられた白夜の声に、綴は足を止めて振り返った。

その先にいたのは何時もどおり、底のしれない笑みを浮かべている白夜。

しかし心なしか、その表情からはいつもはない蔭りのようなものが感じ取れた。気のせい、と言ってしまえばそれまでだが。

「なんだかね、今日は星の巡りが悪い。だから、いつものように厄介ごとに首を突っ込むのはやめておいた方が身のためだよ」

「おいおい、一体どうしたよ？今更俺の心配なんて、らしくないな」

「私は何時だってキミを心配しているさ。一応警告のつもりだけど……何れにせよ、キミの勝手かな。まあ、頭の隅にでも留めておきなよ」

「……へいへい」

そんな言葉を交わして、今度こそ綴は社長室から退室した。

綴が退出した後、社長室の奥に張り巡らされた大きなガラス張りの窓から、物思いに耽りながら夜空を見上げる白夜の姿があった。

その後、綴は適当に情報売りつけようと夜の街を当てもなく徘徊

していた。

この街では、何かを知りたければ黒いロングコートを羽織った黒髪の道化を訪ねろ、という都市伝説的のような噂が実しやかに囁かれていたりする。

大概の人間は、それを単なる噂話として認識しているのだが、一部の人間は、その情報屋が本当に実在するということを知っているのだ。

だから適当にぶらついておけば、その内綴の事を聞きつけた人間が金を懐に入れて情報を買いくる。

彼は、そんな感じで金を稼ぎながら生計を立てていた。

「よう、情報屋。今日も相変わらずヘラヘラしてるな。どうだ、何か買っていくかねえかい？」

「やあ、しがない露天商君。残念だけど、持ち合わせも微妙だし今日の所は遠慮させていただくわ」

「んだよ、つねねえなあ」

「わお、情報屋のお兄さんじゃん。こんな所で合えるとかマジ奇遇」

「ういつす、夜遊び女子高生。ってかお前、せっかく親御さんと和解したんだしあんまり心配させるような事するなって」

「門限少し引き伸ばしてもらったしそこら辺はだいじょぶだって。

それに、あたしこれから帰るとこだしさあ。それじゃねえ」

「あら、誰かと思えば情報屋のお兄さんじゃない。その節はどうも

お世話になりました。今夜、どう？貴方ならサービスしちゃうけど」「これはこれは、見目麗しい何時ぞやの娼婦さん。折角のお誘いだけど、真に残念ながら今は仕事の最中でね。また別の機会にお願いするよ」

「あら、それは残念」

何だかんだと街の中を歩く事数時間、事あるごとに顔見知りから声を掛けられ、体てい良くそれに対応する情報屋こと暁許綴青年。

感嘆するべくは、その知り合いの多さだろう。

しかし不可解ともいえるのは彼らと綴のその距離感。

というのも、彼は過去に起きた惨劇以来、自分で他人との間に線を引くようにしていた。

仲良くなっても仲良くなりすぎないように、その関係性は程ほどにして。

いなくなっでは自分が悲しみを覚えてしまうような、または自分がいなくなれば悲しむような、そんな人間は作ることがないようにと。

だというのに、すれ違う度に声を掛けてくる人間からは、綴に対する恩やある程度の信頼を感じるのだ。

もちろん、ただの知り合い程度の人間だって多い。

しかしそれでも、綴は今ままで何度も自分の引いた線の向こう側へ自ら飛び込んでしまっているというのは事実。

何せ彼は従来のお人よしで、ある程度の範囲ではあるが、困っている人には甘い人間なのだから。

それは傍から観れば愚か以外の何者でもないだろう。

自分で定めた決め事や信念を、自らの行動で否定しているのだから。

本当に彼は、どうしようもない道化。

さて、先ほどから誰かから声を掛けられ、その誰かが去れば、また他の誰かから声を掛けられ　と、そんな流れを繰り返している綴彼自身、その調子では色々と疲れてしまうので人目を避けるべく路地裏を歩いて、表立ってはあまりで歩けないようなその手の人間から声がかかるのを待つことにした。

「ふう。しかし、知り合いが多すぎるってのも考えものかね……」

そう呟きながら、どこか疲れた様子でほとんどと言っていいほど人ひ気とけのない路地裏を歩く綴であった。

act 2・駆ける道化、少女と共に

そこは暗い世界。

喧騒に包まれ、あらゆる建造物から放たれる煌びやかな光が眩しい、しかし些か物騒な夜の街と、さらに一線を置いた常闇の世界。

覚悟もなしに踏み込むのは非常に危ぶまれる、裏の社会。裏の世界。裏の顔。

そんな世界の一部である暗い暗い路地裏。

そこに、息を切らしながら賢明に駆ける幼い少女が一人。

肺が痛い。胸が苦しい。脚が重い。

もうどれだけ走ったか、そんな事は分からない。

とにかく、無我夢中だったから。

気がつけば、少女はそこにいた。

気がつけば、その世界に放り出されていた。

記憶がない。

といっても、知識はあった。

ただ、自分が誰なのか分からない。

以前、何をしていたのか。

どこに住んでいたのか。

両親はどこにいるのか。

いや、そもそも両親がいるのか。

何も思い出せない。

年齢も、名前すらも。

ただ、気付けばそこにいたのだ。

暗い暗い路地裏に。

恐怖を煽る闇の中に。

ただ、ポツンと。

一人で立っていた。

恐怖はなかった。不安もなかった。

すんなりと、自分の状態を受け入れることが出来た。

驚くほどすんなりと。

自然に。

まるで、そうすることが当然のように。

今の空っぽな状態の自分を、これが正しいのだと肯定するようだった。

だが、ソレは突如として襲い掛かってきた。

抱いていなかった筈の恐怖が。

感じていなかった筈の不安が。

体が震える。

動悸が激しい。

何が起きたのかと思った。

そうして、ふと背後を振り向いた瞬間、前に駆け出していた。

背後から忍び寄っていた恐怖に、寸前の所で気付くことが出来た。

背後を振り返って少女が目にしたのは一人の男。

細い目の、軽薄そうな顔立ちで、しかしその表情には狂喜が浮かんでいる。

逆巻く狂気。

渦巻く狂喜

それは、人の形をした恐怖。

何故かは分からない。

しかし、瞬時に理解できた。

あれは、自分を狙っているのだと。

あれは、自分をこの世界から消し去ろうとしているのだと。

体の中から響く、盛大な警報が少女を逃避へと駆り立てた。

それから、随分走った。

どれだけの距離を走ったのかわからなくとも、どのくらいの時間を疾走していたのかわからなくとも、それだけは分かる。

だが、体の中の警報は鳴り止まない。

どれだけ走っても、恐怖は自分を追ってくる。

あれは、追跡をやめない。

そんな確信が、散々疲労した少女を、少女の脚を、ただ闇雲に突き動かした。

そこは暗い世界。

喧騒に包まれ、あらゆる建造物から放たれる煌びやかな光が眩しい、しかし些か物騒な夜の街と、さらに一線を置いた常闇の世界。

覚悟もなしに踏み込むのは非常に危ぶまれる、裏の社会。裏の世界。裏の顔。

そんな世界の一部である暗い暗い路地裏。

そこを、どこか気落ちしながらも飄々と歩く道化が一人。

今日はいつにも増して稼ぎが悪かった。

いくら路地裏を歩いていても、客として声を掛けてくる者は一人としていなかった。

知り合いには何度か会った。

勿論、それは裏の世界に息を潜めている者達。

しかし、客ではない。

皆が皆、知り合いだから一声掛けたとか、そんな理由。

さすがに表を歩いていたときよりは声を掛けてくる人間は大分少なかったが……。

しかし、本当に稼ぎが悪い。
いつもなら一人や二人、客に巡り合っている頃だというのに。

「こりや参った。シロの言葉、こついう意味でもハツタリじゃあな
かったか……。確かに、星の巡りが悪い」

星の見えない曇った夜空を見上げながら、綴はため息をついた。
そして、懐から煙草を取り出して一服しようとしたところで

(…………ん?)

ふと、一つの人影が目についた。

些か遠い位置にいたので詳しい事は分からないが、ただ、その大き
さから子供　少女だということが分かった。

そして湧き上がる疑問。

「珍しいな、子供なんて。　　って、いやいや、珍しいとか言つて
る場合じゃないでしょうが。こんな時間帯のここに、しかも子供っ
て……」

そう、おかしい。

そして危険だ。

こんな場所に子供が一人でフラフラなんてしていたら、このご時世
に人身商売だなんて非人道的な行為を生業としてるふざけた輩に連
れ去られかねない。いや、もう連れ去って下さいと言っている様な
ものだ。

親は何をしているのか。

呆れと少々の憤りを含んだそんな疑念が、綴の脳内に浮かび上がると、そんな事を思っている内に、少女は二人組の男に囲まれてしまった。思った傍からこれである。むしろ、ここまで無事だったのが珍しい。

(やれやれ)

見なかったことにしてその場を去ろうとしたが、気付けば体が勝手に男二人とそれに囲われている少女の下へ動いていた。

そんな自分に、綴は心底呆れた。

幸い、男二人の顔には見覚えがあった。しかも、その二人は綴に借りがある。

今出て行けば、穩便に事を済ますことが出来そうだ。

しかし。

男達と少女に、綴以外にも近づく者がいた。

それは男。

そして、綴はその男の顔に見覚えはない。

細い目をしていて、軽薄そうな顔立ち。

金髪で、ピアス、ネックレス、ブレスレット、チェーンなど、数多のアクセサリーでジャラジャラと着飾っている。都会でなら、幾ら

でも見かけそんな風貌の青年だ。

しかし、それにしても何だろうか。

綴はその男に、その男の浮べている薄ら笑いに、どうしようもない寒気を感じた。

そして、体の中を駆け抜ける嫌な予感。

少女を取り囲んでいた二人が近づいてきた男に気付いた。

そして、あつちにいけ、見てんじゃねえよと、新たに現れたその男を追い払おうとして怒声を浴びせている。

その時、金髪の男から溢れた不可解な何か。

その瞬間、綴の脳内に浮かび上がったのは過去二度にも亘って起きた惨劇。

いつの間にか駆け出していた。

逃避ではない。

怒声を放っている男の一人に腕を捕まれ、逃げるに逃げられない様子の少女に向かって、ただ全速力で駆けた。

「ああーああー、何、なんなの？うっさいよあんたら。ピーピー喚いちゃってさ。オレはそっちのガキに用があるっつーの。ホントうざい。うざいたい。死ねばいいよ」

そう言った金髪の男の口元が、不気味に吊り上る。

「　　そうだよ。ああ、そうだ。死ね。死ねよ！！」

そして。

「殺せつ！！殺人幻想！！」
ジャック・ザ・リップパー

癩癩を起こして叫んだ、狂った男の背後に　ソレは現れた。

同時に、二人の男の体を通り過ぎた何か。

気付けば、男達の胴体から上の部分がなかった。

上半身を失った下半身からは、噴水のように血が噴き出る。

不可解なソレを従えた金髪の男の細い目はいつの間にか見開かれ、その中から現れた瞳には狂喜の色が浮かんでいる。

男の背後にいるソレ。

それは、異形だった。

ヨレヨレでボロボロの、薄汚いと言えるフード付きコートを羽織り、そのコートの下から伺える体、特に四肢は、どう見ても人間の物ではない。

関節部分には人間の関節とは言い難いあからさまな稼動部位、つまり人形のような球体関節があり、腕の稼動部位は三つ程で、人間の腕と比べて三、四倍程の長さ。

しかも、コートの下から見えるその腕は二つだけではなかった。

右に三つ、左に二つ、そして先端には、鋭くそして細身ではあるがとても禍々しい白銀の刃が接合されており、それらの要素から、どう考てもソレを人と捉えるのは無茶な話だった。

極め付けに、顔の部分に取り付けられた表情も何もないただの鉄の仮面。

なんとなく、その異形は無機質な殺人マシーンを連想させた。

いや、キリングドール殺人人形と形容した方が言い得て妙か。

鮮血を浴び、恐ろしく残酷な光景を前に、少女は呆然とし、その少女を金髪の男は気が狂ったように口を吊り上げながら見据えている。そして男二人を切断したその力は、今まさに少女へと振るわれようとしていた。

「ひやはは！ああー、愉快愉快。ひひっ、ごめんなあガキ。なんかお前を殺せって頭の中がクソうるせえからさ、取りあえず　スパ　つとなっちゃえよお！」

男の叫びに呼応するように、背後のソレ　異形の殺人鬼が、その右腕の一つを薙いだ。

しかし。

だが、しかし。

「……………ああ？」

少女が、引き裂かれることはなかった。

何故なら、先程までいた筈の位置には、既にその姿がないのだから。そして、その理由も至極単純。

「クソっ、何やってんですかお前さん！子供は国の宝物なんだぞ馬鹿野郎！」

金髪の男から少し離れた位置には、地面を転がってそう叫びながら、懐に少女を抱きかかえている黒い外套を羽織った黒髪の男がいた。

綴だ。

そう。間に合ったのだ。

間一髪のところ、綴は少女の小さな体を抱きしめるとそのまま死の閃光から逃れるように飛び退いたのである。

しかし、少しかすったようで、右肩の辺りが少し裂かれていた。

いつものヘラヘラした笑みはどこか遠くに吹っ飛び、綴のその顔には必死さが浮かんでいる。

抱きかかえられた少女は、いまだ何が起こったのか理解できていないようだった。

「んだよ、テメエ。……………邪魔すんなよ」

綴の姿を視界に入れて、そしてその綴が自分の邪魔をしたのだとすぐさま気付くと、金髪の男は

「邪魔、すんなよおおおおおっ!!」

酷く憤慨した。

それと同時に、綴は駆け出していた。
当然、少女をその胸に抱えたまま。

「クソが!クソがあああああっ!!」

叫びながらそれを追う、金髪の男。

こうして、命がけの鬼ごっこが始まった。

「はあ、はあ！」

そこは暗い世界。

喧騒に包まれ、あらゆる建造物から放たれる煌びやかな光が眩しい、しかし些か物騒な夜の街と、さらに一線を置いた常闇の世界。

覚悟もなしに踏み込むのは非常に危ぶまれる、裏の社会。裏の世界。裏の顔。

そんな世界の一部である、ゴミ袋や粗大ゴミが散乱するように放置された廃れた様子の人気のない橋の下。

そんな所を、息を荒げながら駆ける道化が一人。懐に抱えているの幼い少女。

そんな彼を追っているのは、人の形をした恐怖。

異形を いや。

怪物を いや。

それは 幻想を、操る者。

綴は走りながらも背後を見やり、そこに金髪の男の姿がない事を確認すると、手頃な粗大ゴミの物陰に身を隠した。

やはり幼子と言えど、人一人を抱えて全力疾走するとなるとかなり堪える。

その場に休憩がてらしゃがみ込み、身を隠している木製のタンスに背もたれて荒い息を整えていると、ふと、抱えている少女からの視線に気がついた。

「……………」

何か言葉を発することもなく、少女はただ無言で不思議そうに綴の顔を見つめている。

「……………お嬢ちゃん、名前は？」

事が事であるし、個人としては事情から尋ねたかったのだが、とりあえず綴は名前から聞いた。

というのも、命を救いはしたものの、少女から見れば所詮綴も素知らぬ赤の他人だ。

先程の凄惨な光景を目にして、ショックだって大きい筈だろうし、綴に対する警戒心だってある筈だ。

だから、まずは何気ない会話で少しでも落ち着かせ、ほんのちよつとでも距離を縮めて事情を話しやすくするようにと名前を尋ねた訳だが……………。

少女は無反応だった。

それに少しばかり傷ついた綴であったが、めげずに口を開く。

「あぁっと、やっぱりあれか。名前を尋ねるなら自分からってか。うん、そうだな。それが礼儀だよな。俺とした事がうっかりしてた」

少女の様子を伺いながら、綴は続ける。

「俺は綴。暁許綴だ」

「……………ツツ、リ？」

すると、少女は小さく綴の名を反芻し、小さく首を傾げて見せ

た。

少女から反応が返って来た事に喜ぶが、しかしそれをあまり表には出さないようにしながら再び言葉を続ける。

「そうそう。そうだよ。俺は綴。えっと、それで……お嬢ちゃんの名前は？」

再度名前を尋ねても、少女は何も言わずただ俯くばかり。

だが、今度は無反応ではなく、俯くというちよつとした反応が返ってきたので、綴はNever Give upの精神で口を開いた。

「えっと……名前、言つの嫌か？嫌ならさ、無理には聞かないけど……」

そんな綴の言葉に、少女は小さくだが首を横に振った。

その反応に、綴は疑問を抱き、すぐさま尋ね返そうとしたが

「……わからない」

少女の発したその言葉に、綴は咽まで出掛かっていた言葉を口にすることが出来なかった。

そして、再び疑問を抱いたが

「……そっか」

尋ね返すことはせず、ただそう零しただけだった。

それから、また今の調子で急かす事無くゆっくりとしたペースで他

の事について聞いてみたが、返ってきたのは全て「わからない」の一言だけ。

そして、そこで綴の脳裏には記憶喪失という言葉が過ぎった。

自分のことを知られたくないからという理由で、少女が嘘を吐いている可能性もあったが、どうもそのような気配は全くしない。本当に、何も知らないかのような口振り。

とりあえず綴は、少女が記憶喪失という事にして話を進めた。

「それじゃ、あの金髪の男がなんで追いかけてくるのかも分からないのか？」

少女は小さく頷いた。

そして、口を開いた。

「……気付いたら、暗い所に立っていて……それで、急にあの人が現れて、追いかけてきて……」

自分のことが分からないという事に対しては不思議なことに不安や恐怖を抱いていないような様子だったというのに、少女は男の事を口にした途端、唇を震わせながら、不安や恐怖の意を表した。

それについてまたしても疑問を抱いた綴であったが、そろそろ動かなければあの男に見つかってしまうだろうと思い、会話を一旦中断させた。

そして立ち上がろうとしたが所で、ふと、少女は呟くような声量で言葉を発した。

「……ねえ、ツヅリさん」

ポツリ、と。
弱弱しく。

「ツツリさんはどうして……見ず知らずの筈の私を、自分に危険が及ぶって分かっています」

助けたの？

無口なイメージの少女が、その幼い外見からは考えられないような理知的な物言いで、珍しく長い言葉を発し、そう続けようとして

「っ!？」

綴の鮮血を前にして、口を嚙んだ。

気付けば、綴の右肩を、白銀の刃が貫いていた。

そう。

それは刃。

あの金髪の男の背後に佇んでいた異形の、死の刃。

「見いーっけ」

聞こえたのは、あの男の声。

狂喜を孕んだ、背筋が凍ってしまう程に恐ろしい 声。

それは、まるで死の宣告のようにも聞こえて

「まあったくよお。てこずらせやがって、この粕が。屑が。ゴミ野郎が。テメエもガキごとぶっ殺してやるから覚悟しとけよお？」

いつの間に接近していたのか。

眼前に立っている男を前にして、綴の額には冷や汗が浮かぶ。いや、額どころではなかった。痛みからか、それとも焦りからか、全身には大量の汗が溢れ、そして肩を穿たれた事によって綴の顔が苦痛に歪む。

金髪の男の指示なのか、彼の背後に佇む異形は、障害物であるタンスごと綴の肩を貫いていた刃を勢い良く引き抜いた。

「ぐ、うつ……！！」

綴の顔が一層苦痛に歪む。

しかし、それは綴にとって幸運だった。

もし、つい先程までのように身を隠していたタンスに肩を縫い付けられたような状態であったならば、綴は身動きを取る事が出来ず、異形の刃によってそのまま八つ裂きにされていたことだろう。

つまり、刃を引き抜くという行為は金髪の男にとって決定的な判断ミスだった。

あのままタンスごと綴の肩を貫いた状態のままであれば、身動きがとれない綴を容易く殺害する事が可能であったのだ。

金髪の男が刃を引き抜いたのは、今彼の頭を襲っている酷い頭痛によつてまともな状況判断が出来なかったが為であり、また、眼前にいる生意気な男とその胸に抱かれている少女が身動きの取れない状況に陥っているのを前にして、高揚していた為でもあった。何が原因かは知らないが、男は妙な興がのってしまい、綴の肩を貫いたその刃も含めた全ての刃で、切り裂くのではなく滅多刺しにして殺し

てやろうと考えてしまったのだ。
結果、綴に逃走のチャンスを与えてしまった。

「く、つそ……!!」

次の瞬間には、綴は再び駆け出していた。
勿論、少女を胸に抱いたまま。

その突然の行動に隙をつかれ、金髪の男はろくな反応が出来ないまま
まである内に、瞬く間に異形の刃が届く射程範囲内から離脱されて
しまった。

「ああ……イライラだ。イライラする。ちょこまかちょこまかと……」

金髪の男はその姿を瞳に映しながら、しかしすぐに追いかけてようとはしない。

俯き、額に手を置きながらそう呟いた。
そして次の瞬間、勢い良く顔を上げる。

その顔に浮かぶのは憤怒。

壮絶な怒り。

こちらに背を向けながら疾走している、黒い外套を羽織った道化への憎悪。

「イライラすんだよ、テメエはよおおおおお!!」

男は咆哮した。

そして背後の異形の右手の一つが先程のダンスに突き刺さり、そのまま振り上げ、勢いをつけてダンスを綴の背中に投げつけた。

綴と男には、今や大分距離があったが、しかし異形の投げつけたタンスは一直線に綴の背中へぶち当たった。

「あ、ぐっ……!!」

突如背後から訪れた凄まじい衝撃に、綴の思考回路は一瞬だけ停止した。

一瞬。一瞬だけでも、頭が真っ白になってしまう程の激痛。それは、本日二回目の経験だった。

一度目は、言わずもがな、肩を貫かれた時だ。

気付けば、綴は地面を転がっていた。

停止した思考が明白になった時、目に移ったのは転々とする周囲の景色。

しかし、腕の中には少女がいる。

思考が停止しても尚、転がりながらも、綴は少女を無意識に抱きしめていた。

少女が投げ出されないようにと。力の限り。

転がっていた綴の動きは停止し、地面に蹲る。

逃げなければ。

立たねば。

立って、逃げなければ。

そうは思ったとしても、綴は背中から伝わる尋常ではない激痛に身動きが取れなかった。

(骨が、いかれたか　?)

綴の脳裏に、そんな不安と絶望がよぎる。

そうなってしまうては、もはや綴に手はない。

立てなければ、逃げることさえ出来ないのだから。

そうなれば、この身を犠牲にして、少女だけでも逃がすしかない。

そう考えたが。

(何てこった)

気付いた。

気付いてしまった。

自分は余程焦っていたのだろう。
だから、気付かなかった。

綴が逃げようとしていたその通路の先。
その先は　行き止まりなのだ。

例え、少女を逃がしたとしても、すぐに追い詰められてしまう。

(　シロ。やっぱりお前さんの言う通りだったな)

本当に、星の巡りが悪い。

厄介ごとに首を突っ込んでしまった所為で、こうして自分まで死ぬ羽目になるのだ。

綴は嘲笑した。

自分を。

本当に馬鹿だと、嘲笑った。

愚かだと、蔑んだ。

結局自分は、過去の惨劇から何も学んじやいない。

何も変わっちゃいない。

自ら引いた線の上を、容易に飛び込んだ結果がこれだ。

しかも、初対面の少女のために。

笑えない。

笑える筈がない。

しかし。

しかし不思議と、少女を助けた事に後悔はなかった。

そのことに対しては、少なくとも、悔やんじやいなかった。

少女を恨んでもいない。

いや、恨むなど見当違いもいとこだらう。

無闇に足を生みいれたのは自分なのだから。

後悔があるとすれば、少女を生き延びさせることが出来ない事が。

そう考えていた所で。

ふと。

「ごめん、なさい」

少女のそんな声が聞こえた。

「ごめんな、さう……」

とても悲しそうな。とても苦しそうな。
そんな、少女の声が。
綴の耳には、確かに聞こえた。

「私の、せいで……」

ああ。

「私のせいで、ツヅリさんが……」

何ということだろう。

「こんなに、ボロボロで……」

何故。

「こんなに、キズだらけで……」

何故、こんなにも小さい子供にこんな顔をさせなければなら
ないのだろうか。

「見ず知らずの、私なんかの為に……！」

何故、こんなにも幼い女の子にこんな顔をさせなければなら
ないのだろうか。

「ごめんなさい、ごめん、なさい……！」

何故、こんなにも心優しい娘にこんな顔をさせなければなら
ないのだろうか。

「じめん…な、さいい…っ…！」

何故っつっ…！！

綴は悲しかった。

少女を泣かせてしまった事が。

綴は悔しかった。

少女を謝らせてしまった事が。

綴は憎かった。

こんな小さな少女さえ守ることのできない不甲斐ない自分自身が。

だから。

だから綴は。

「そんな事、言いなさんなっ、て……」

言った。

途切れ途切れの、力ない言葉で。

「私なんかとか。そんな、悲しいこと、さ……。言わないでくれよ

……」

自分を貶すなど。

「君は…小さい子供なんだ。幼い、女の子なんだ。守られて、当然……なんだからさ」

自分を恥じるなど。

「そう……、そうだ。守られて当然なんだ。だから……守るぞ。守る。生かしてやる」

そして、守ってやるぞ。

「死なせはしないよ……。自信は、ないけど、ね」

綴は、確かに言った。

だから、立ち上がる。
傷だらけのその体で。
ボロボロなその両足で。

暁許綴は、少女を守るべく　立ち上がった。

どうやら、案じていた骨の方は無事だったらしい。
その証拠に、立てる。
まだ、走れる。

少女の為に、駆ける事が出来る。

綴は確かな意志をその双眸に宿し、少しずつ歩み寄って来る幻想を
従えたその男を睨みつける。

そんな綴を見て、金髪の男は面白くなさそうに口を開いた。

「ホント、苛々するぜテメエ。んだよ、正義の味方でも気取ってんのかよ。ああ？気にくわねえ。イライラする。テメエみたいな善人気取ったクソヤロウはなあ！！！」

いや。面白くなさそうに、は誤った表現であった。
正しくは 憎々しげに。

「ああ……、そうか。そうだな。少なくとも、テメエはマシか。あいつ等よりは全然マシだな。ああ、勿論俺なんかよりもな。イライラするが、認めてやるよ。そうだ、テメエは少なくとも、そのガキにとつちゃヒーローだよなあ」

奇妙にも、男は綴を称賛した。

その突然の不可解な言動に、綴は密かに眉を潜める。

「だからだ。だからこそ気にくわねえんだよ……。なんで。なんでそのガキは救われて、アイツが救われなかったんだよ……。なんでだ……」

そう言いながら、男は顔を俯かせていく。
気付けば、男の足は止まっていた。

アイツ、それは誰の事を指しているのか。

そして、ほんの数秒の沈黙。

「なんでだあああああああああああ！！！」

男は、空に向けて咆哮した。

「違いは何だ！！そのガキと、アイツとの違いはあ！！あんなにも

馬鹿みてえに優しくかったんだ！アホみてえにお人よしだったんだ！
なのに、なんでだ！！なんでアイツがあんな目に会わなくちゃなん
なかつたんだよあ！なんであんなに優しくかったあいつが報われねえ
んだ！！なあ、オイツ！！」

綴を追いかけた当初、男は綴の事をただの邪魔者とは思って
いなかった。

綴を追っていたのは、少女を殺す為。

しかし、いつの間にならうか。

追跡を続ける内に、いつしか、男の標的は綴に抱かれながら逃走す
る少女から、綴へと変化していた。

目的が変わったのだ。

少女を殺すことから、綴を殺す事へ。

それは、己の過去と現在の状況を重ねたから。

重ねてしまったから。

昔、大切だと思っていた少女は無残な死を遂げた。

救いたくとも、男に少女を救うことは出来なかった。

だからだ。

だから今、目の前で幼い少女を救おうとしている綴が、過去の自分
と重なってしまった。

少女を抱えながらこちらを睨んでいるその黒い外套を羽織った男は、
本当に勇敢で、幻想を従える自分に対して、対抗する力もないくせ
に、無力なくせに、それでも尚、少女に手を差し伸べ、彼女を救お
うとこうして自分と対峙している。

そんな黒い外套を羽織った男に、彼は嫉妬しているのだ。
本当に、ヒーローのようなその男に。

だから、見当違いな怒りの矛先を向けている。

どうしようもなく、羨ましくて。

どうしようもなく、妬ましくて。

「畜生……。畜生、ちくしょう、チクシヨオオオオ！そのガキとアイツは……。俺と、テメエは……。何が違うってんだよおおおおおおおおおおおお！！」

綴は戸惑っていた。

先程まで、目の前の金髪の男の事を、てっきりただの殺人で快樂に浸る異常者かと考えていた。

いや、異常者であることに間違いはないのだが……。ただ、今の慟哭に耳を貸す限り、どうも過去に悲しい出来事があったようだ。

どうやら、以前はまともな人格者であつたらしい。

それが、どういふ経緯を経てこうなつたのか。

ふと、最近になつて小耳に挟んだ話を思い出した。

何やら男女間の争いで、精神的に追い詰められた女子高生が不幸な現実に耐えられず、ビルの上から飛び降り自殺を凶つたという、不幸な少女の物語。

その少女、生前はとても心優しい優れた人格者で、周囲の人達からはとても慕われていたと言う。そんな少女が痴情の纏れで自殺した

という事実を、当初、周囲の人間はとても信じられなかったらしい。

もしかしたらその話と金髪の男の過去に何か関係があるのだろうか。

ちよっとした類似点からこんな話を連想してはみたが いや、それは考えすぎか。

そう思考した所で、綴はその考えを脳内から弾き出す。

今はそんな事を考えている場合ではない。

そして、目の前の男に悲しい過去があつたとしても、そんなものは関係ない。

綴の知り合い二人を惨殺し、そして少女をも殺そうとしているのだ。許されるはずも、許す気にもなれない。

(最も、許すも許さないも第三者の俺に決める資格なんてないんだろうけど)

そう心の中で呟きながら、綴はこの場を逃れる為に、弄した策を実行に移そうとする。

実は、綴は金髪の男が叫んでいるとき、とある作戦を考え、そしてその下準備を密かに整えていた。

その作戦とは、先程綴が転がったときに地面に落とした、今は金髪の男の踵辺りに落ちている携帯を用いたもの。

それは幸運か、綴は携帯を二個ほど所持している。

仕事用と、私用。

落としたのは仕事用で、手元にあるのは私用の携帯。

男が携帯を踏むのではないかとひやひやしたが、なんとかなった。そして、足元の携帯にも気付いている様子はない。

(よし)

霞み逝こうとする意識と境界の近い己が肉体を力の限り鼓舞し、前を見据える。

それから密かに隠し持っている手元の携帯の決定キーを押そうとして、そこで少女が口を開いた。

「ツヅリ、さん……」

不安そうな少女の声に、綴はどこか不適で、そしてできるだけ優しい笑みを向けた。

「大丈夫。この綴お兄さんに任せなさいよ」

そう言つて、少女を安心させる為とはいえ大丈夫だなんて無責任な言葉を吐いた事に自責の念を感じたが。

「はい」

少女の、不安と恐怖はあるがどこか少し安心したような笑みをみて、綴は頷き、金髪の男に視線を向けた。そして携帯の決定キーを押し、私用の携帯から仕事用の携帯にメールを送信した。それと同時に、綴は大地を蹴る。

眼前に佇む恐怖に向けて。

青年は勇敢に、疾走する。

「ははっ！馬鹿かよテメエ！自棄になったかあ！？真っ向から突っ込んでくるなんてよお！」

金髪の男がそう発して。

「なら、お望みどおり」

『』

「！？」

突然鳴り響いたその音に、男は音の発信源である足元に一瞬だけ目をやった。

ただか一瞬。

だが、一瞬だけでも気を逸らすことが出来ればそれでよかった。そして、これは賭けだ。

綴は地面をおもいつきり踏み蹴り、宙を舞った。
その先にいるのは、幻想の担い手。

そのまま、綴は男の顔面に頭突きをかまそうとして。

「っ！？」

その瞬間、賭けは失敗に終わった。

思いの外、男が携帯からこちらに意識を向きなおすのが早かったのだ。

宙を舞っている綴。

もはや逃げ場はない。

男の顔は歪んだ。
歓喜するように。

「残念だったなあ！」

そして、男の背後に佇む殺人鬼のその刃が綴を切り裂こうとして

（え？）

綴は空中にいなから、一瞬だけ心の中でそんな疑問の声を上げた。
何故なら、その場に一つの異変が舞い降りたからだ。

男も戸惑っていた。

そう。消えていたのだ。

男の背後に佇んでいたあの異形が

何が起きたのかは分からないが、それは僥倖。
寸前の所で、首の皮一枚が繋がった。

呆然としている男の顔面に。

綴はおもいっきり、己の頭を叩き付けた。

「ぶっ！！」

勢いをつけたその頭突きは凄まじく、男はそのまま勢い良く
背後の地面に叩きつけられた。
そしてそのまま、後頭部を襲った衝撃で、その意識は暗転する。

「つつっ！！」

一人に衝突して尚その勢いは止まることもなく、男が気絶した後、綴は地面に投げ出されてそのまま転がった。今日一日で、何度地面を転がったことか。勢いがとまり、もはやふらふらの両足で立ち上がり、男が気絶しているのを確認し、そんなことを考えながら綴は胸の中の少女に向けて言った。

「なんとか、なつたな」

そんな綴の言葉を聞いて安堵したのか、再び泣き出した少女を見て、綴は少々困ったような笑みを浮かべ、そして彼もまた、心の中で安堵した。

そこは暗い世界。

喧騒に包まれ、あらゆる建造物から放たれる煌びやかな光が眩しい、しかし些か物騒な夜の街と、さらに一線を置いた常闇の世界。

覚悟もなしに踏み込むのは非常に危ぶまれる、裏の社会。裏の世界。裏の顔。

そんな世界の一部である暗い暗い路地裏。

そんな所に、ボロボロな姿の道化が一人と、それを傍らで支えながら歩く幼い少女が一人。

それは勿論、綴とあの少女である。

彼らは今、綴の知り合いである医者 of 営む小さな診療所に向かう途中である。

綴は歩きながら考えていた。

それは、あの時の事。

金髪の男の背後に佇んでいたアレが、突如として消えたあの瞬間の出来事。

あの時。

あの時、確かに聞こえた。

綴の脳内には、声が響き渡っていた。

『 少し、手を貸そう』

そう、聞こえた。

あれは、何だったのか。

あの澄み渡るような、透き通った声。

それは、女性 いや、聞いたこともない少女の声だった。

だが、なぜだろうか。

綴はその声はどこか懐かしさを覚えると同時に、その脳裏には、過去、目の前で亡くしてしまった二人の少女のおぼろげな姿が過ぎっ

たのであった。

act 2・駆ける道化、少女と共に（後書き）

はい。

この次の話からact 0の続きになります。

それで、以前からこの物語をご愛読して下さっている方々にご報告です。

この章以前の話を、少し修正しております。

故に、時々「ん？」となる箇所があったりするでしょうが、その時はお手数ですがact 0とact 1を読み返して頂けると幸いです。
ちなみに、目立った変更点につきましては、白桜の名が白夜に変わっていたり等。

ホント、こんな作者で申し訳ありません。
更新もすんごい遅いですし……。

ほんと、申し訳ないです。

見捨てないで下さいね！
おねがいますっ！

PS・もしも物語の矛盾やおかしいと思った点がありましたらドン
ドンお申し付け下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5187i/>

透徹のタナトス

2010年10月8日12時25分発行